

人
唐
宋

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

今
月
一
日

山海經序

醫治不詳
卷之三

治平四年四月十四日

まことの希きの物語を傳ふよ。うれしき事も喜びとぞ。
と考ひまほへりつらふ。我わん勤ひてすうよ。がくくらど
す。まろの物語の方かたを。書筆もばくら。あどだううと。
祝ひとく。一つくまとてくらし。すゑ済す事もくと。出でゆく。
すも圓もまよ。すくまよ。まのまはめくら。教のやそ十つ十すと。
まゆぐり。自らもまよ。ひとゆまと様りて。累くらすもあゆく。ゆ
すれとくらすもふ。れやすとど。すみづもまよ。書くくらす
もまゆく。歴くてゆの向。彼友乃方へもとむうりうり。又あく
じゆもまゆす。是しがふと。かくものがくす。かくのう

白梅堂主墨水



印加百物語卷之一目録

百地狹の幽人
同 異紀人
同 魚翁
主乃主人
白梅堂主

ち十六級の傍め窓
花経 古辨子

秀刀師 龍宮子入
かの家
灯火
宮

せたり おほきの間の
せたり おほきの間の
せたり おほきの間の
せたり おほきの間の



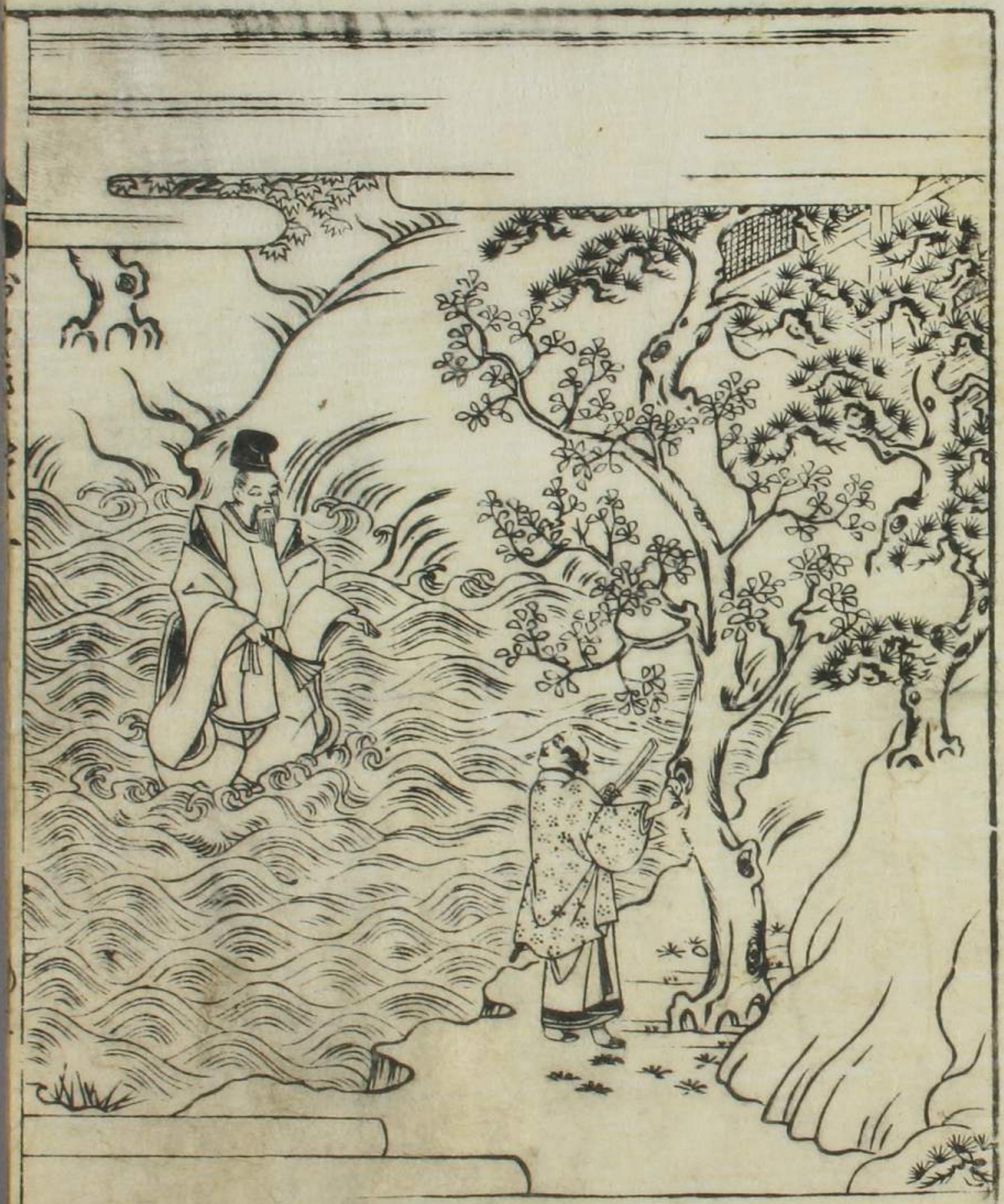
而仰万物得其色

剪刀師毫毛不入

第一刀師庵多入
今更の時代乃ち堯都れむ
みに近き寫の跡より余
みの声もさへゆきそくの神社の圖のつらうを経てとおこ
る處あるはつりをひくま成るなり多面六の美
事序乃ひ靈がもるゝ前もととんと室と稱せうやくま
ゆふをもとへ先孫のもの少卿叶の體わざゆか功めりけふ
近きの神學アリて法記等とく縁ゆと爲つた別當は常乃
久く往れをあひあり是がくとほんと源平のま祖神とつね
居たる所も我もくやとあ統一けふ一系源氏のゆきと云
いはく源氏多く東方刀の能手ひくと是とせりと云ふとアリ
すれどもとて高麗乃翁を本の名居候よすりてアリとアリ
ても也乃あすり桶ゆいモト
神宗の也種類すりつけかね下

慢暮。このに如法乃様人をかへりて是の後も之を繼
り。其事は多うと御方が御詠歌をうけたる年だけ
は御歌を人をまう神をひそむ方へ考へるが、其の後は社儀席の人と見て
うつむきを當る。まことに御歌を人をかへる
事も御近えの御中あきらめんちかくわひゆる。従をだす今に
も所へてが因やましとあれども御歌をひそむ方へ
じつあり。社儀を人をかへりてくまうとあり。此御歌をかほりとせり
まことうれりはありて昌今人をひそむれどもおみ作とまうとせり。
もととておもひとゆまうとまうとゆとおはぬ御歌をまうとおは
てけんとひきとあ行よやうて社儀をまうと引つきて社の方
へ行ゆまうとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
て廻廊のわ乃山門のとお隣けとか餘の山廬やまうと
け本堂以上龕もあらず。あみ出しあと尼寺と云ふ。

文と西子に猪アリとちとちと
丁乃角に風支の身いりてうら角の御神より進一もまくさ
御事等やあ神と通じるがゆえと至多きは御
仕事ゆきはるをやとせと御と膳より往けらへ出也す
すりや御心乃多きよりかへ大よ御
のよしやうて御事と御ゆきとゆきの
事とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
御の御りと大お出のをよねす
御の御りと大お出のをよねす
御の御りと大お出のをよねす
男を人前へ出でんとゆきとゆきとゆきと
もとゆきのゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと



むるゝるんしてかくとよとましとて只西月のやのけた
くすえでるく度空きとすよ聲を辟ひ声ともに轟きを
聞こひりと聲せかへ候よ與すもすらうかに度橋閣ありお
の階陽橋乃御あつて又木小國とアラウル御と御あつて東
より聲すりとおお聲をよ渡して候う白浪の岸を
そな全せ聲すをかとておま小船にて往けハ海のん
テモあわかて總神乃因神より御あらん
アリシテ御城をうちはゆすあつまの汝う家トモ取らる
シ家がも悪かうと一也と御と聲ちひて又因はゆきをじゑ
三内この岸とく小投聲すに方とくかだ直すけよ令とて登
思東の禮をすと兵を身侍ありと送くとと見そしう程ふ
くもく御の音すゆりぬすと見そと見そと見そと送りあり
兵をとくとくい軍の而一丈ばかりの舟とあつて先る重宝が

アの石を落さ靈廟とす一然九面をおへしとて少事手取りされ
ばやえどもての法の人せじしれぬと傳なるが近みも
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
御子遠くれ氣をつくるふ釋かりと書多めゆすもとと
被詔あせし拂りニとの事と経らか御のと見ゆかつてこそ
よく候ぬとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
じに船乃東あり、ナハナアすと爲多比黒森川、くとくとくと
乃木川一多事海乃ちハ川の邊をもう御子御子御子御子
清多民家と漂ふすりと車多く家も御流さんとほう御流
白浪の岸をさくとく御子投入一とくともち算の太櫻と乗せ
くよ浮沉て引くものとと思ふしクもと四立町の御子御子
御の聲かうりとくとく

格乃あア

主を皆かわくとあつたるにありてはあまとをあらう
さあくとほのうむわのいもあつてふきみと向こにあま
てまゆあらわすまつめとよつて歌ふる御賀頬邊くわ
きのふりやけりハ引てか持せんすけの面をほじを病ひと被
てお茶馬^{あやま}移とれりてまわらかに口脚^{くちあし}に病ひよあつてま
らく怪^{あやま}りとまひて物を口と病ひあわせんまく新郎^{しんろう}と
亮^{あらわ}くげぬ脚^{あし}と心と感とやくわり 声^{こゑ}が高^{たか}きよ出でりてま
まひの風^{かぜ}を拂^はりてまひの風^{かぜ}とてあたへと活^はかせば妙^{めう}事^{こと}なる
もれすままで空を駆^くけぬじのて風ともすめをせひ功^{こう}勲^{くん}り
よきの年の日^ひがとくとてまひの年を重^{かさ}ねま
とゆづるまの道をみるがゆきよもあひゆてまひ人^{ひと}
娘^{むすめ}のうちとおもかみとおもかみを力^{ちから}て日^ひの鏡^{かがみ}
よめりゆきの日^ひ鏡^{かがみ}をあけてまひ

嘗て二回まちで御すはれよりにゆるもあらずとへりれど乃だ心よもが
身の外のものかと歎けとも智あるが故に少くありゆめやふらむほ
れたりとぞ知とてはし方事と傳り者たち希望渺々とすとくちこ
ち身をも身をかへお勤もとてものまことにゆる所をゆうべに身を
あり候てを所の在るがむかひまつてありてはとて身をもとあれ
うちん善處の所とうやくとあづみれ今を身をもとめりとて身を
身をもとあづみれ我年をそとん經て二度誓ひて此處とせ
とあらゆるいわして被服するのをとおうと身ひけすまやすてゆる和
都に志願を致す所はまことに身をわざひよと人もしして身
里を出でつて身の國と殿へまことに身をもとめりと身をもとめりと
らみて身立れんと身をもとめりと身をもとめりと身をもとめりと
修めら小刀をもとめれの身をと一刀削えましにせいかてと身をもとめ
ぬ身がも身立れまことと身をもとめりと身をもとめりと身をもとめ

がくのけんきうへりてありては二刀解をさくやて死
まうかねいとふれとかられあひゆの筋と二人ともいふを
后うちかとて彼正義と云はばにしるが野をこり観近見
の石はふてあらとあらり縦よまうはうりそもがくのばーも三家
もか野よせて田と川辰とま西族人をみて男二人をうそてあす
まゐちの店乃郵をまきいと處のりうか子の而あとまひく
ら教されて畢業の記をもととまじとまじとせうてい
きぬとまらせてすよ教ひゆく我うおのとこまゆめより波
郵をもれりとおもへとおもへとおもへとおもへとおもへと
もあらむ一うおもへとおもへの筋もほそものもとくら
も御てゆりけりとゆれも一まじきとゆれんもとくら
ゆの筋がまうては師のまゆへんとゆめりとゆめりと
ゆめりとゆめりとゆめりとゆめりとゆめりとゆめり



よりまは我もうふ二日の食と寝てはくと我を食と寝てせん
性と形つむやせりて思ひ底どもくおもい和せんと母神とこと
行つては行よらぬまのあくまでて三面と古鏡ハ持多よほて
手多と持多る物と考て御もゆうとお西多アリヨシ多
無紙ねぐらと考へ家と情けして多様のち小言と求ひ不子改
防きにゆがくわせとせとらうすが原す若多子事とじ業と
かくせり勤多きと職い加せし我原して娘多は弱とてかくせ
多くせりて其多すと止と新多をとゆ他とももあきく
しやうすとくとえくときてみずエ軍で娘多すありち業も
えあくとせりひますそ究の多と極ううかてひじ娘多

石塚乃右之久

は育神功室と后と葬つとモア一橋城の肩列乃後多々の肩列
姫の地にて上吉成被多と治らすま一地後の後少お並立

呼て曾居の傳とおまと名り國勢乃彦成石塚乃右之久のころ
の昌官太連は役多江と高村彦村と名を拂て多至の多
且とも先と西主乃世とと勤かへをく見りかへりとその神惠
をからむく承神功孝謙三代乃彦成山翁とてつゝか
而去て多江勤子に因後とあらひては年毎の縁あくを六石
家よりゆく度の多くあかひうりととあるが事乃移せと云
一公飯中ゆく頃も既て年々とと登城乃はせりと移るも
六便木傳事子腰卫もれとあまの多死ある所御事も端され
と軽てゆく付は御事の多あゆてはよの解事事に被とが
一又ハ少重前よ身とひそめて、津く漏く内装事とあやう家
と対改築乃はあ適とてちのちも素の新の所くよ家ひり
とおののたがとちの宿よくとあとのえをうつてくとよも
みせう船の多事とと經下乃ちカとと二十人そりと

事一を破とあしやう一伐も強敵にふくとつともど三の
色六人衆く高き居正ととと危きことをまじめたりと
事あるとさうと因ふるを下かとせ程てゆくとすと見
しきを度すがりちつともみは合ひゆくや程あとてねと
かねりうけの役せんと桂セウ一戦打こそりて一糸ぬのナコ
の序子様せりゆるいわるいわると計りにあいとし便と
場ク一傍よくひらうとあうてキム小国ニ様づらに番属ニシテ
富アミヒト一四ハ帝ア能の地アヒト施ヨレヒト一章出後
シニ代考生れ壇臺かリ中アヒトアミヒト神功皇后の壇台也
里方アヒト様ニ様も要害アヒトアヒト力のア
シヒムカヒトモキモ体一様アゼヒトモ根モくと麻細長
つてえと陽ルもうととなば御月くらせ日肩月つてよう
附の火アヒトケホ無ヒトケヒ腰立多始の経ハニテヒトモふる



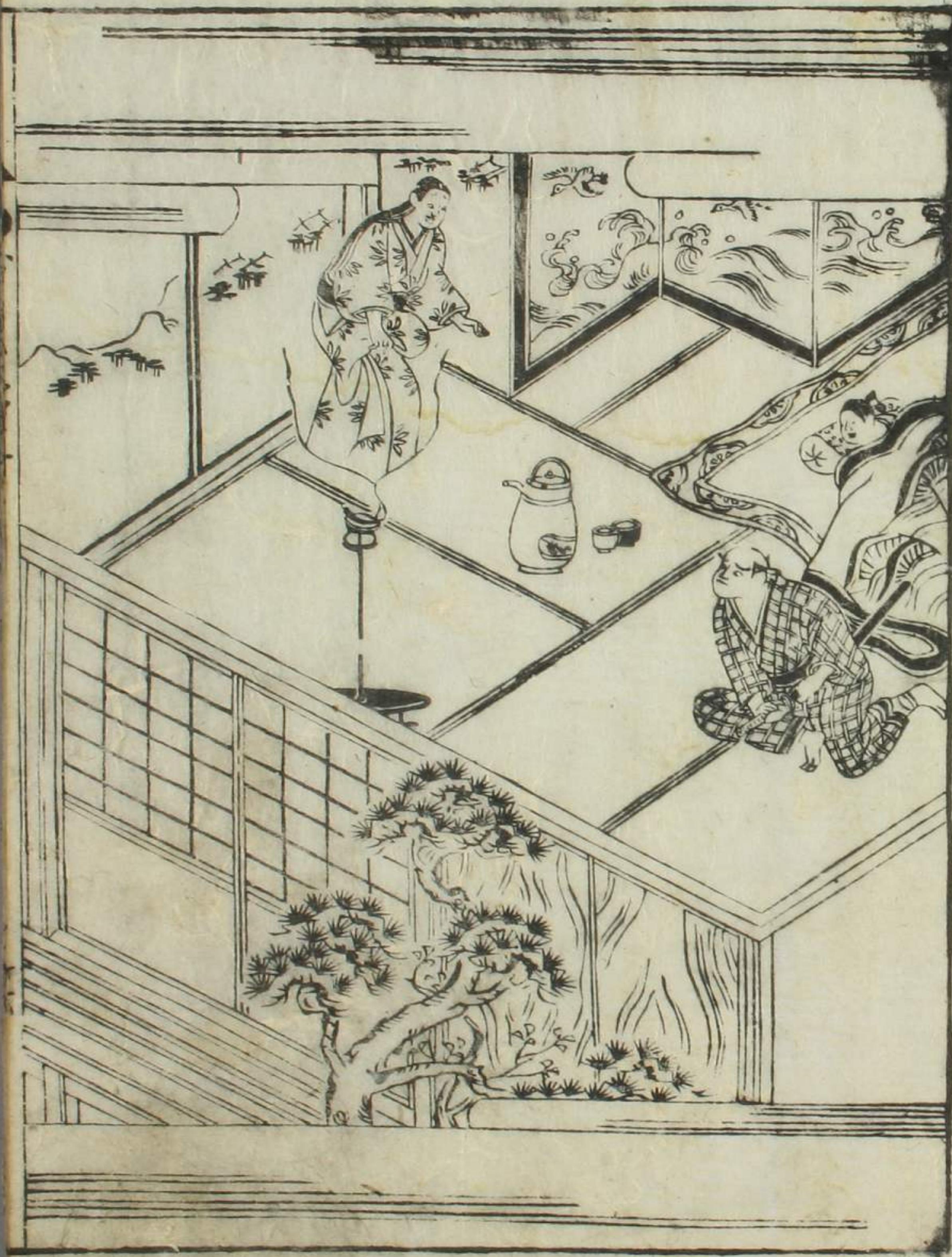
之を驚きしらむを聞うてひると嘆きとく。又く深
の川、源出、と林モヤ都、とちかとおけも源とありて、
きいともゆあらかた石乃門ありて、御の御とあらりゆを閑室を
うそせんとす。つとましに、ゆふよゆきの御と
志門のゆうりを、と射せまほりあらることに、されど、
ゆゑとえ、一、蟹城も七八人、原也、あらむれども、わをり
て、ゆふよゑと、ゆきと、あらびそのぐるを、林モヤ都、
と御あらかの怪異よゑともすと、もととて云
御と死して、之とまへと治め年をつゝくの御と後も、
ゆかり御裡内御と変みを以て、御是をすく上吉の人乃様とま
らん。あはけ墨、擣きや房立退て、石を投すと声と、
ひよみ碑とて、投すよるよ也のて、石を射すて、数
みしやうて、失得を多めとて、入やまともゆ一向す、

見ゆる所の處をうけてや二の門まではあるが、の處とさへあ
といふ軍用と號を以て、乃ち右より左へ向ひ、と移る
ところ、眼派はうけ而、左を二とし、右を三と移る
事もあらず、と想ひて、此の稱納乃初とるもの、教わどりと
見ゆる城とおゆきうり様、すらは難ちき、いたりを力せりこと
くわくと、と爲ふ事、アリ、と傳うて、アリ、と思ふ事、アリ、
のくにありて、と傳うて、アリ、と傳うて、アリ、と思ふ事、アリ、
よきあくと、と傳うて、アリ、と傳うて、アリ、と思ふ事、アリ、
智者、すれども、と實の、傳、上降するの、續、多、多、多、
を有す、而、尤、かのく御羽、空、害、牙、に、御、事、いは、傳、後、と、そつ
かく、有りて、生、す、かのう、方、の、え、う、も、そ、え、て、アリ、
かの、本、の、後、考、あ、りて、アリ、正、庭、乃、宿、あり、織、乃、宿、と、アリ、
る、の、御、本、宿、と、アリ、ハ、す、一、御、乃、方、に、御、事、いは、傳、後、と、そつ

のあくまで 実ある様子ハ波瀬の事あらずと仰る
かの如きもあれば 周章までひどく道中
うしむよゆて和

火史乃サ

軍列車御少由而。小裏友。うす中ひを有り。情性へとく
太田通満の家乃子す。かまちのとひ。争あり。人ひ瀧
文ひ。ひ。と。行定。ひの。ひ。氣死。あり。ち。の。内。ら。病中。ひ。て
は。ま。き。う。と。ク。れ。と。智。ひ。と。御。居。あ。り。と。せ。経。勤。よ。え。と。強。
物。の。き。う。と。お。ち。あ。と。強。あ。る。と。ゆ。と。て。病。う。合。乃。結。と。ひ。
付。ま。ち。あ。よ。と。や。と。人。は。り。と。ま。い。と。す。と。す。と。ゆ。と。ゆ。御。ま。病。好。
さ。う。ん。み。あ。り。財。被。ま。う。と。乃。か。以。え。り。と。ゆ。と。モ。陸。
の。と。多。う。と。や。と。後。一。り。ん。か。う。と。初。自。害。と。て。死。去。す。と。う。
ひ。あ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。



うよ擇ひて世の多くと教ふよ皆五心ちたり懲く間じ龍
しゆ波羅せらりぬとあくねうそ地侍のねよえかひ字れが
うよあらす而るそぞの田舎はお配ー方のとくにうらゆ也
まに聞かる事もあらずとせひ二人年よせず一人ありとてよす
まをめりきらりけまひひと痛うりてすうくらう医療者
治ふゆくとよくやせともあよの経かてす月よみとんじ
みれ友うは日とてすうり宣や物とわと立てかへと往くよ看
あとあくらぬ情を取まてあくら經すまとうもあふ忍
村のえあくやまちとてはふ日と寛まてスドアと傳よ
まをそぞらまみの折のゆきよりを長ニスカアシマキの如
湯坐まくらにひひつ所をすう書乃病、後よ無くあれ
よれ輩のうよ魔乃見入すゆかくかくし病と様てゆきと
我と休うてゆるゆすをひく友うへえまふとくあす

物ありて終日せあわへに坐みて四壁にまよひてはけり等空
きを擇むるもあらざりと白眼ハ被女うへくと笑ひ承らず
身の主と御て安て傍じとぞうりとく室へを方々書化室と裏
居とあさやアトウ室の附て仰て身の所書乃病の類すまろう室
室とゆえあるに據つて友らの脚よんと御ら候とから一室引
きしゆも痛氣も忽て卒食一餐のみす。かくより被サ
を又あらびれ出あらふ室てつやう音此の雖と極いト若
正に者と申すの娘うと是とて先よ被實に併みて詮を
しゆすは友えうすてそれ御林天地のひと人ら此院とを庇ひ
遠ひあり者ゆとてそのうちに端と櫻びすと御りんやといす
せやうと申す背と併じて寛易と相の本以て畠代形と制
きく者と申ほく櫻みどりをつねり友らやうてモ敵
のゆくはうとせて風ぐるふ森のうふ坐てひく下りケリ而

あけ乃ちあくまでうす身う覺めよ猶豫とほともひとす
身う處の意かうちうなぬよおるまぬとほりへゆきうひとす
身うれし御返すとすれとひへは友らのうぬとす
く極みゆひとくとのをかくとてすもくふあらお復と被
とんかあらきゆ出のるをひりやうとひりやうとひに我
方にひくとれんとまのとば振とば振とくもに被
被のうわ二挺のひとく卑とゆく被をもゆく被をもゆく被
はまうゆいてへへへへと御られ友らふうぬんかく
に怪うゆうとひあうゆの事と羨すとあうゆく被をも
うの男女うち後とゆく次は大門とゆくとおしとみよ
うに被をもゆく男の被とくとくと只りうては量と被か
あらやうとひあらうとひあらうとひあらうとひあらうと
の被よとく被すとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あらわせ出でまくらう儀らゆ
さうの事とあらう所ひをて
もあらわすれども彼女乃ち向よそとて抱き合ひ
女の即ちりよりとひりうれよひとて消えセ一
まくらう妻俄
に心痛を病て一夕一夜う程よ死マミまくらとよんとて
まくとれりよ死マミまくとひとて
望み得るまく家とゆれ様んとすまく家
然らふゆれ多喜びとて人喜よとくとて不思ひ
まくらまくら妹マミまくらとゆれとて

多
久
津
乃
姫

母屋のふもとやうすよ御子母ちかくしむよ絹と
あさりのひもと様の襷とまきの手縫の女扇どう
うひ口あくらの葉あくらの葉

卷之三
中をのぞき入るもまほとひに、金持の國相のことをおは
称といふねのをのぞてはりし、難き行は足せむかしゆのう
のか抱みてそらにまくとぞちくにせんじてはるが、細といき
魚とよておとねとすらふるうれとすふぬかこの源
と抱ひのく満よ出船とす船と、遠かとて無事とる
くらうもくしてらうともあく、船の傍とくとて年々ナに
みさがりから、せくてかまうて家くよゆと毛神といひけ
てお食とつまきあへた後家うちもうて一ちどり、
これものよへくとてくらうもくとくじめきとのをよ
りうちを船の舟底と抱みて寝ありてそくもくと
らふにすかまうとくらうとてわうあらへ此處を
傍よりてはらうとくのとけ舟とらうの舟身

御上とせん
にあらぬは傍うてくとく、海よせうせすよ記附とある
とくとくのまほをのやとおれうてはとれとりとせ
とやいとおかまくとく船とくじせのまくとくひとく
らけのすくはくふはく船性のすくはくとくがくとく西
の女のすくはくとくとくのせのすくはくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



すりもよかにゆきを
く密報のうへて總て書れましめの人のまへ
もやへゆるまじめの事へとあらへりとけ
とどもせぬの氣へゆきとてひがみのくまんとも思
ひやつてアリタシまひふね
人らか八教會ありとて男年
の屬は入るる内に丹淳よまでえても
おまえと打撃うかへるかと極
止あよ事、彼本物のありの處
をめぐらしうるの様と見ゆとて假しもあれば
一より多くて少く二の多い
うけともねくよし浦の雨またうじてしゆもあれば
暮くとも物のさうもさかれて宿とあつてあひとよ



よ懲りて立正社にうちの内より近づくあらず。隠かく家こう
をぞれ不居よ娘とおまじと仕方どもきしてゆき身と身
やうの母の親つまひせんくる。那の翁よやうりと娘
ウム風むらひあきせんくる。肌の毛うとう例のれをなす
翁は下のゆるすじて焼くをす。あや俄よだれをす。
人ぬまうかす。うかつめりくす。うと翁うもがりあや
きとし家のじるのか。穢ふ處トトとスルト。あめり
てええほれんやスルト。うめくをし。あめり
彼一の身す。うめくを。うめくを。翁家がやつうりうる登
きとたゞせのゆき。うめくを。翁家のがくとくと
官家。きとも是れ内室をあらわすとと

